

ちょっとスリルの乾徳山（2020m）へ

岩井 淑

乾徳山登山口経由の西沢溪谷行きバスを下車したのは8時55分だった。リュックを背負った5人が同時に下車し、バス停の隣の土産物屋で6人のパーティが話し込んでいる。これから乾徳山へ登るのであろう。

水の補給は塩山で済ませてきたので、すぐに歩き始める。

徳和川を渡り、川沿いに上流に向かう。村の古老が挨拶をくれる。気持ちのいい朝だ。それにしても、この徳和という集落は実に花の多い村だ。各家の廻りは言うに及ばず、道路沿いのちょっとした空き地にも花が植えられ、いたる所から花々が微笑みかけてくる。この村は心の優しい人が多いのだろうか。

アヤメ、ショウブ、ダイコンソウ、ムラサキツユクサ、マツバギク、ミヤマオダマキ、テッセン、フジ、・・・数えていけば百科僚乱の程をなす。それらの花々が、元気に登ってこいよ、と応援してくれているように感じるのである。

歩き始めて20分。杉林の林道脇に立つ登山道入口の道標に出会い、いよいよ山道に踏み込む。これでやっと登山の雰囲気が出て来る。

汗が出始める頃、休憩中の30代前半の3人パーティと出会い、挨拶をすると間もなく、清水の涌き出す銀晶水に出る。今日の登山ルートには、銀晶水、錦晶水の2カ所の水場があり、その内の第1のものである。

もう下山してきたのであろうか、むぎわら帽子を被った男性登山者と出会う。この銀晶水の涌き水の量は多くはないが、木陰も程よく、喉を潤し休憩するには、もってこいの場である。しかし、ここからも地元の造園業者による岩石採取のために山肌が削られ、ブルトナーの爪痕も露な山が見受けられ、実に痛々しい。

松や落葉松の間をしばらく歩くと、幅1m程の岩が10個ほど露出している駒止めに到着した。ここで今日最初の休憩を取る。歩き始めてから50分の場所であった。休憩中は四方八方からウグイスやホオジロ、シジュウカラなどの小鳥のさえずりが心地よく耳に届く。

5分の休憩後、再び歩き始めると山菜採りの3人組女性ハイカーと出会う。ヤマウドやミツバを採っているようだ。

クマザサの明るい登山道に微かなせせらぎの音が耳に届くと間もなく錦晶水との出会いだった。20代の若者10人程のパーティが休憩中であり、この涌き水は音をたてて流れているほど実に豊富である。

喉を湿らせていこうかな？ との考えが一瞬、頭をよぎるが駒止めからまださほど歩いてはいないので、そのまま通過し国師ガ原へと向かう。

カヤトにおおわれ、牧場となっている国師ガ原へと飛び出したのは、30分そこそこの時間であった。ここでようやく乾徳山が眼前に登場した。ウン！いい山だ！。

登場した乾徳の木樹は、まだ芽吹いてはおらずに灰色であり、上部には大岩がドッカと座っている。標高2020mを有する乾徳山は5月下旬の時期になっても、まだ春の訪れを待っているのである。

早朝4時40分に家を出、用を足さずに来たためキジ撃ちにカヤトの中に分け入る。どういふ訳か、ケーン、ケーンという乾高いキジの鳴き声が偶然にも間近から聞こえ、これが本当のキジ撃ちだ、などとひとりごちる。足元の薄紫色をした可憐なスマレの花がそよ風

に吹かれて可愛い。

さっぱりしたところで国師ガ原を突切り、ジグザグの山道を登りきると扇平の草原である。今日は今シーズン初の山行なので、ここらまで登って来ると相当、足にこたえる。カヤトにおおわれた原っぱは明るい褐色一色であり、まだまだ春はやってこないように見受けられるが、落葉松などは1cm程の若葉を出し始め、キツツキのドラミングが聞こえてきた。ああ・・・一気に喉をかけ下り、胃の中へ汲み込んでいく水が旨い。

双眼鏡を取り出し、まだまだ雪深い残雪の山々を右奥から眺めていくと、突然雲の中に富士の頂上が飛び込んで来た。アッ！と一瞬思い、本当に富士なのか確認する。今まで雲に覆われ、どの方向に富士が見えるのか判然としなかったのだが、もし晴れていたならば誠に見事な風景であろう。

さあ、目指す乾徳山山頂は、あと1時間弱の距離に迫った。これまではタイムスケジュール表を片手に持ち、メモを取りながら登ってきたが、いよいよ登りも厳しくなるので両手をフリーにする。

岩のゴロゴロ転がる登山道へ再び取り返し、倒木をまたぎ、岩を乗り越える。こうならなくては山登りは面白くない。やがて最初の鎖場が現れた。これは鎖などなくてもよい場所なので、鎖の使用は避け、裏側から回り込むようにして大岩の上に立つと、さすがに眺めは抜群である。

はやる気持ちを抑え、第2の鎖場に臨む。3m程の高さだが、岩はほぼ垂直である。3点確保を確実にし、最後の所だけ鎖を使う。

第3の鎖場は山頂直下20m程のもので、角度は80度位だろうか。最初の5m程をクリアすれば、あとは鎖は無用となる。

2度トライしたがだめなので、どうしようかと思案中だという50代後半かと思われる女性登山者に手や足の置き場を教えながら、途中で待っていると、やっとのことで登って来、お礼をいわれる。初めての鎖場体験だと言う。この岩場を登りきれば、石のほこらが設置されている山頂である。

山頂は2020mの標高と乾徳山と書かれた木製の標柱が立てられ、その標柱には数日前に集団登山を行った地元の笛吹中学2年生全員の名前が書き込まれた黄色の手作りプレートが吊されていた。このプレートを見ていると、ああ俺も中学2年の時、集団登山で榛名富士に登ったなあ、などと遠い思い出に浸るのだった。

大岩だらけの山頂からの眺めは、ぐるーり360度。気持ちイーイ大展望である。富士は先程よりも姿を現し、僅かな残雪の南アルプスの山々もすぐそこに連なっている。

山頂の登山者は4人とまだ少ないが、これから続々と登頂して来るであろう。それらの登山者がかわるがわり記念写真を撮るであろう標柱から7～8m離れた岩場で昼食の準備にとりかかる。コップとコンロを取り出し、味噌汁を作る。

今日は握り飯を用意せずに塩山で菓子パンを4種類買ってきたので、パンと味噌汁という変な取り合わせなのだ。食事中にも続々と登山者が登って来る。皆一様に2020mの標柱の前でハイ、ポーズ！である。

乾徳山は、ちょっとスリルを、ちょっと岩場の感じを味わうことの出来る鎖場があるので、それを乗り越えホッとしている登山者の笑顔は本当に楽しそうである。1時間程山頂に滞在していたが、無風のポカポカ陽気の下ではいつまでもいつまでも寝そべっていたい気持ちだった。

1990, 5, 26, 記